



上川町の病院改革

HTB報道部旭川駐在
和嶋利典

私はHTBの旭川支局に駐在勤務する34歳のテレビ記者です。平成20年の4月に着任してからの5年間、南は富良野、北は稚内まで道北地域の事件・事故、そしてマチのさまざまな話題の取材と報道を担当してきました。今回の執筆依頼を受け、まち医者ならぬ“まち記者”としての視点で私見を述べさせていただきます。

着任から1年ほど経った平成21年の春、私は上川町の町立病院を取材しました。当時は全道の自治体病院の経営赤字が顕著となり、各市町村が真剣に打開策を模索していた頃です。そこで私が出会ったのは若きイケメン医師、上川町立病院（現在は上川医療センター）の院長として赴任したばかりの安藤高志医師でした。安藤医師は医療法人北海道家庭医療学センターから派遣された“家庭医”の1人で、31歳という若さ。当時上川町は道内のどのマチの自治体とも変わらず過疎化が進み、町立病院の病床利用率の低下に苛まれていました。病院の経営赤字は年間約2億6,000万円にまで膨らんでいたのです。町はその抜本的な解決策として総合病院を縮小し、診療所化する道を選びました。診療所化は当時道が提唱した自治体病院の財政健全化策でもあり、上川町はその策を実らせるためのパートナーに家庭医を選びました。私は夕方の報道番組で『町唯一の総合医療機関が閉鎖の危機』『家庭医が過疎化のまちを救う？』などの言葉を並べ、その実情を視聴者に届けました。その取材の中で「5年、10年とこの町に住み続け、町の人たちと共に歩んで行きたい」と実直に語る安藤医師の姿に驚きを感じたことを、今でも鮮明に覚えています。神奈川県出身の安藤医師はそれまで、道北地域になんの縁も持っていなかったからです。旭川で生まれ育った私は分かります。この地域で暮らすことの不便さ、そして小さな町だからこそ生じるであろうさまざまなしがらみを。希望を携えて過疎のまちにやってきた若き医師が夢に破れ、いつかまちを去る姿を想像したくなかったからです。

あれから4年あまりが経った今年1月、私は安藤医師のもとを再び訪ねました。あの時感じた不安が解消されることを願って。しかし、そこで私の目に飛び込んできたのは町立病院という“箱”が見事に生まれ変わり明るくなった姿と、すっかり院長としての貫録がついた安藤医師の姿でした。ほとんど使われていなかった病棟は町営の介護老人保健施設と

なり、施設にはお年寄りたちの笑顔が溢れていました。そして、久しぶりに会った安藤医師のそばには3人の家庭医の後輩がいました。さらに2億6,000万円あった年間赤字は、病院・老健あわせても6,000万円あまりに圧縮されたといいます。病院改革のその後。そこには記者としては疑ってかかりたくなるほどの成果が表れていたのです。何より町民からは満足の声が聞かれました。「先生は何でも話を聞いてくれる」「ちょっと待ち時間は長いけど…仕方ないよね」「訪問診療のおかげで母を自宅で介護できるようになった」などの歓迎の声です。上川町は医療法人・家庭医療学センターとの連携で恒常的な医師確保も実現しました。上川町の佐藤芳治町長はこう言い切ります。「これからも従来のような大学をあてにした専門医の確保は現実的に無理。医者を増やすといっても10年以上かかる」と。その言葉の裏には、病院改革を自分たちの手腕で軌道に乗せたことへの自信が伺えました。

国が強いリーダーシップを発揮せず、地域医療を置き去りにしていく中、過疎の町が早い決断で身の丈にあった医療体制に立て直し、これほどの結果を出したことは称賛に値すべきだと私は思います。地域の医療は、心ある医師たちの時間と体力を削って成り立っていることは明白で、その医師たちの思いに応えられる“現場作り”を今後も行政は率先して進めるべきです。

上川町が今後目指すのは訪問診療のさらなる拡充と聞きました。町の人口はこの4年間で約400人も減っています。「生まれ育った町で、どのように死んでいくか。どのように死ぬるか」これは地域医療を語る上で、最終到達点とも言える大きなテーマでしょう。上川町は今回の病院改革を契機として、在宅の高齢者にも目を向け始めました。今後も医療と福祉のために行政ができること、すべきことをどんどん提示し続けていってほしいと思います。

最後に、これまでの特集記事で、多くの医師の方々への悲痛な叫びを目にしました。不眠不休で地域の医療を支えていらっしゃる医師の皆様へ最大限の敬意を表します。今後も医療関係者の皆様と共に考え、共に思いを発信できる報道記者でいられるよう、努力を続けたいと思います。

私も多くの医師の皆様と同じく、24時間いつでも呼び出しを受ける携帯電話を、会社に持たされていますから。